

音楽の散歩道 その6

— 懐しい女性歌手達 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

「思い出のロックン・ローラー」

ジェーン・バーキン, 1978

“……60年代のロック・ファン

あの狂騒のあなたの年月は、今どこ？

あなたのアイドル達はどうしているの？

消えていった

ブライアン・ジョーンズ, ジム・モリソン,
 エディ・コ克蘭, バディ・ホリー, イデム,
 ジミー・ヘンドリックス, オーティス・レディ
 ング, ジャニス・ジョプリン, Tレックス,
 エルヴィス……”

私の脳裏をジェーンの歌が駆け巡る。

歌は世につれ、人生は歌に連れ。

私達は幼少時から、数えきれないほど多く
 の歌手、歌に出合い、年月を重ねてきた。

pops, jazz, rock, folk, soul, blues,
 R&B, C&W, screen and instrumental
 music etc.

舞台や銀幕の star から、満天の star になっ
 た歌手達も多い。

去年はオリビア・ニュートン・ジョン、今
 年はジェーン・バーキンが天上のスターと
 なった。

どの時代にも、時代を代表する歌手がいる。
 今回は、私達の若かりし頃の星の数ほどいた
 歌手達の、ごく一部ではあるが、LP のジャ
 ケットを眺めながら、彼女達を回想する。説
 明は最小限に留める（図1）。



図1 シルヴィ・バルタン他, 時代の演奏家

〔1〕アメリカ編

世界的名声を博した歌手は、例外なく、努
 力により自分を研ぎ、個性を伸ばす事により、
 頭角を現したに違いない。

ただ彼女達の全てが、私達、他の者からみ
 れば、幸福な人生を送ったようには映らない
 だろう。然し、彼女達自身は皆、その人生に
 後悔はないであろう。

（1）私は誰でしょう？答えは後述。

図2の左右の端の人物は同一人物である。
 この女性は、多くの困難を乗り越え、魅力的、
 個性的女性像を創りあげた代表的人物。



図2 私は誰でしょう？左右端の女性

(2) ジュディ・ガーランドとテンプルちゃん

(1922～69, 47歳)

タップダンス、歌、演技に天賦の才能を示し、30年代米映画界最高の大スターとなり、20世紀フォックスを背負い、大恐慌時代の米国民の精神的支えとなったのが、“テンプルちゃん”の愛称で、世界的知名度のあったシャーリー・テンプル(1928～2014, 85歳)であった。彼女がアカデミー賞を受賞したのは、6歳の時で、この最年少記録は、現在まで破られていない(以上、付録)。

1939年のMGMの「オズの魔法使い」のドロシー役には、テンプルちゃんが、ほぼ決定していた。然し様々な事情により、ジュディにこの大役が決定したのである。

ジュディは「オズ」により、39年にアカデミー賞を受賞。その後は、歌に映画に大活躍し、20世紀フォックスの伝説的なエンターテイナーとなった。

然し、彼女の人生は同時に苦難の連続でもあった。肥満、薬物中毒、神経症、自殺未遂などで、入退院を繰り返した。

54年のアカデミー賞は「スター誕生」では

なくなぜか「喝采」のグレース・ケリーが受賞。そのグレースも82年、車を運転中に、ガードレールに激突し、40mの崖下に転落し、不幸な死に至った事は、記憶に新しい(52歳)。

ジュディは69年、ロンドンで大量の睡眠薬服用にて浴室で死亡。自殺とも言われる。

61年のキャピトル創立40周年の“ミス・ショー・ビジネス”のカーネギー・ホール・コンサートは“ショー・ビジネス最高の一夜”と言われ、グラミー賞2部門を獲得(図3)。



図3 ジュディ・ガーランド

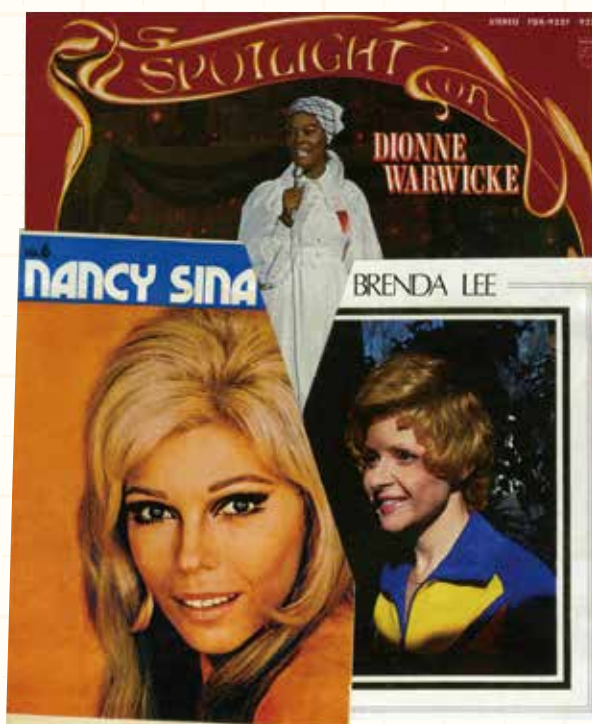


図4 上:ディオンヌ・ワーウィック
下左:ナンシー・シナトラ
下右:ブレンダ・リー

(3) ナンシー・シナトラ

(1940 ~)

フランク・シナトラの娘、ナンシーは、私達の世代の初期のアイドルであった。

「シュガー・タウンは恋の町」「サマー・ワイン」「ジャクソン」「007 は二度死ぬ」のテーマなど懐しい (図4 下左)。

(4) ディオンヌ・ワーウィック

(1940 ~)

叔母の娘がホイットニー・ヒューストン、母の従姉妹がレオンタイン・プライス。

音大時代にバート・バカラックと出会い、卒業後「サン・ホセへの道」「恋よ、さようなら」など、バカラック作品でヒットを放った (図4 上)。

(5) ブレンダ・リー

(1944 ~)

小柄ながら、パンチの効いたエネルギッシュな歌唱で“リトル・ミス・ダイナマイト”の愛称で知られた。

「ジャンバラヤ」「ロッキン・アラウンド・ザ・

クリスマス・トゥリー」など、多くの曲がヒットし、カントリー・ミュージック殿堂、ロカビリー殿堂、ヒット・パレード殿堂入りした (図4 下右)。

(6) オリビア・ニュートン・ジョン

(1948 ~ 2022, 73 歳)

イギリス生まれ、オーストラリア育ち、アメリカで活躍したオリビアは、私達と同世代のアイドルで、昨年、乳癌で死去。

「そよ風の誘惑」やジョン・トラボルタと共演のミュージカル映画「グリース」など心に残る。彼女のサインもかわいい (図5)。



図5 オリビア・ニュートン・ジョン

(7) カーペンターズのKaren

(1950 ~ 83, 32 歳)

「スーパースター」「遙かなる影」「イエスタデイ・ワンスモア」「雨の日と日曜日は」など、爽やかな声は世界を魅了した。

甲状腺薬の大量服用による過激なダイエットで32歳で死去。神経性食思不振症が、当時話題となった (図6)。

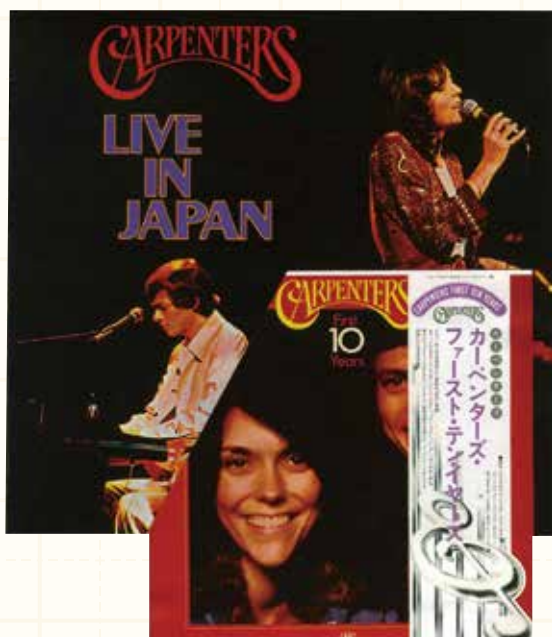


図6 カーペンターズ, カレン

(8) ドナ・サマー

(1948 ~ 2012, 63 歳)

1970 年代に入り、ディスコ音楽全盛となる。ダイアナ・ロスらと共に“ディスコ・クイーン”であった。

「オン・ザ・レイディオ」「マッカーサー・パーク」「フォー・シーズンズ・オブ・ラブ」等ヒット。ジャケットのセンスもいい。

63 歳で肺癌で死去 (図7)。



図7 ドナ・サマー

(9) マドンナ

(1958 ~)

「ミュージック・ビデオ (ビデオ・プロモーション)」を取り入れ、ディスコ音楽と過激な衣装で、最も成功した女性アーティストとなった。

彼女の LP, CD 売上は 3 億枚以上とも言われる。

例えば、アルバム「ライク・ア・ヴァージン」を聴くと、タイトルや歌詞は若干過激だが、アップ・テンポのビートの効いた演奏に乗って、執拗に繰り返すフレーズなどを軽快に歌っており、歌唱自体、全く気にならない。むしろフランスの方が桁違いに過激。

然し曲と曲の間を中断なく演奏しつづけ、

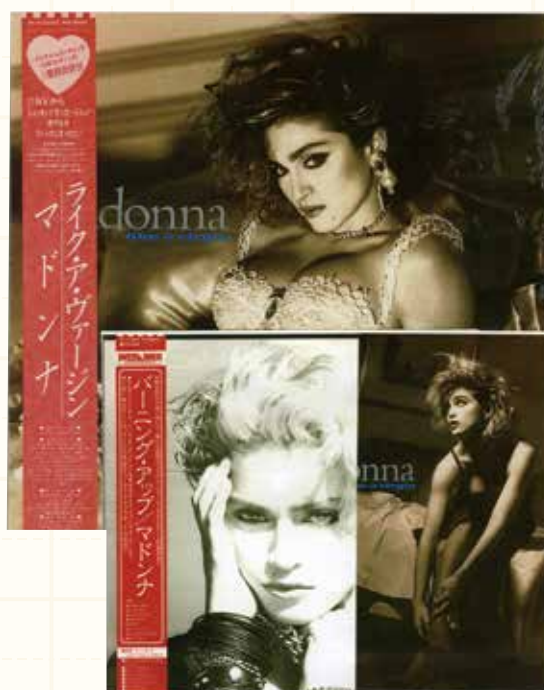


図8 マドンナ

〔2〕ドイツ編

ここでは、ドイツで活躍した歌手をあげてみよう。

〔10〕ヴィッキー・レアンドロス

(1949 ~)

ギリシャ生まれのヴィッキーは、9歳で西ドイツでデビューしたアイドル歌手。

「恋はみずいろ」「思い出に生きる」や、片言の日本語で歌う「カーザ・ビアンカ」や「待ちくたびれた日曜日」など懐しい(図9)。



図9 ヴィッキー・レアンドロス

〔11〕女性デュオ、バカラ

2人共、スペイン人で、黒の服はマイテ、白い服はマリア。彼女達は非常に歌のセンスが良い。西ドイツでデビュー。

70年代のディスコ・ブームの中、「誘惑のブギー」は、1,800万枚のメガヒット。

女性シンガーの曲としては、ホイットニー・ヒューストンの「オールウェイズ・ラブ・ユー」、女性シンガーが多数参加した「ウィー・アー・ザ・ワールド」に次ぐ歴代3位。「世界で最も多くのレコードを売った女性デュオ」としてギネスに認定。70年代に最も売れたレコードとなった(図10)。



図10 バカラ、マイテとマリア

〔3〕英国編

オリビア・ニュートン・ジョンやジェーン・バーキンは英国生まれだが、除く。

〔12〕ダスティ・スプリングフィールド

(1939 ~ 99, 59歳)

ロンドン生まれ、歌唱力ある実力派歌手。「プリーチャー・マン」「とどかぬ愛」「この胸のときめきを」など思い出される。

一時、薬物、アルコール依存に悩まされた。乳癌で死亡(図11上)。

〔13〕シャーリー・バスシー

(1937 ~)

007シリーズのテーマ曲「ゴールド・フィンガー」「ダイヤモンドは永遠に」「ムーン・レイカー」などが、記憶に残る。

20世紀後半、イギリスで最も人気のあった女性歌手の一人で、エリザベス女王より、大英帝国勲章を授与され、デイムの称号を持つ(図11下)。



図11 上:ダスティ・スプリングフィールド
下:シャーリー・バスシー

(14) マリアンヌ・フェイスフル

(1946 ~)

マリアンヌと言えば、アラン・ドロンと共演した映画「あの胸にもう一度」であろう。当時の彼女は本当にかわいかった。ミック・ジャガーと親しかった事でも知られる。

エンジェル・ボイスと言われた歌声も、アルコール、薬物中毒、自殺未遂などで、数年後には、見事なハスキー・ボイスに変化したのは、ショックだった(図12)。

(15) リンズィー・デュ・ポール

(1948 ~ 2014, 66 歳)

ロンドン生まれのリンズィーは、センスの良い歌手だった。「マイ・マン・アンド・ミー」「レッツ・ブギー」「ダンシン・オン・ア・サタデイ・ナイト」「シュガー・ミイ」など、印象に残る曲は多い(図13)。

ショーン・コネリー、リンゴ・スターとも親しかった。脳出血で66歳で死去。



図12 マリアンヌ・フェイスフル



図13 リンズィー・デュ・ポール

〔4〕フランス編

(16) ジェーン・バーキン

(1946～2023, 76歳)

仏で主に活動したジェーンはロンドン生まれで、大英帝国勲章・オフィサーを授与された。

彼女は「野生のエルザ」「冬のライオン」などで、5つのアカデミー賞を受賞した作曲家ジョン・バリリーと18歳で結婚（その後、

離婚）。

68年にセルジュ・ゲンズブールと出会い、69年「ジュ・テーム・モワ・ノン・プリュ」でセンセーションを巻き起こした。

以後、セルジュの歌を歌い続け、誰にもまねできない独自の世界を創りあげた。おおむねワン・パターンではあるが、繊細で魅力的な曲も多い。

本年7月に死去したが、ジェーンやオリビアから、時の流れの速さを感じさせられる(図14, 図15)。私とほぼ同時代を生きたお二人の御冥福をお祈りいたします。



図14 ジェーン・バーキン(その1)



図15 ジェーン・バーキン(その2)

(17) セルジュ・ゲンスブールとシャルロット

(1928～91, 62歳) (1971～)

セルジュの曲、フランス・ギャルの「夢見るシャンソン人形」の大ヒットで、彼の名も広く知られるようになった。

「ジュ・テーム」は、当初、親しかったブリジット・バルドーに提供したが、その内容からブリジットが拒否。ジェーンとのデュエットで大反響を呼んだ。

84年、ジェーンとの子供、13歳のシャルロットとのデュオ「レモン・インセスト」、86年に「魅少女シャルロット」をプロデュースし、話題となったが、実際はジェーンの二番煎じで期待はずれであった(図16)。



図16 上:セルジュ・ゲンスブール
下:シャルロット・ゲンスブール

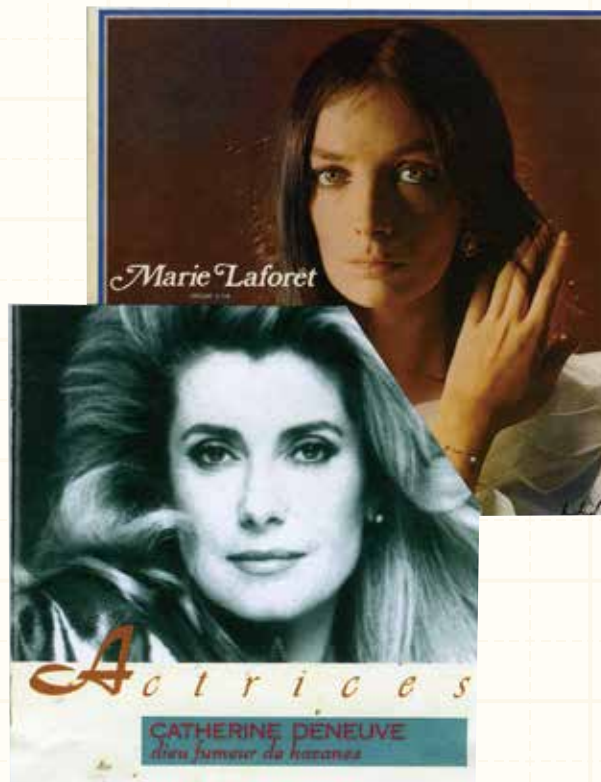


図17 上:マリー・ラフォレ
下:カトリーヌ・ドヌーヴ

(18) カトリーヌ・ドヌーヴとマリー・ラフォレ

(1943～) (1939～2019, 80歳)

カトリーヌは、映画「シェルブールの雨傘」「昼顔」「哀しみのトリスターナ」……, マリーは、「太陽がいっぱい」など仏を代表する大女優であり、彼女達がどのように歌っているかは、興味のあるところだった。

ここに提示したカトリーヌのアルバムでは、全12曲がセルジュの曲で、彼とのデュエットの邦題「ジュ・テーム～Part II」にも興味を持ったが、全曲の曲作りもジェーンと全く同じで、出来もジェーンに遠く及ばない。これは、ジェーンをほめるべきかもしれない。

マリーの歌唱は、シャンソンとしての体裁は一応整っている。「サマー・ワイン」「青春の光と影」など馴染みの曲を、彼女の仏語で聴ける事が楽しみ、と言えるかもしれない(図17)。

(1) マリリン・モンロー

(1926～62, 36歳, 米国)

さて、当初の図2の答えを、皆さんは分かったであろうか？マリリン・モンローである。

彼女は孤児院や里親家族で育てられた。決して恵まれた環境ではなかったが、利発であつただろう事は想像がつく。

16歳で工場労働者のドハティと結婚した。高名なプロ野球選手ジョー・ディマジオ、作家ヘンリー・ミラーとも結婚した。然し幸福な結婚ではなかった。

ヌード写真も撮り、ピンナップ・ガールの仕事もした。

彼女には、夢と根性があり、歌、演技、ダンスを学び、ハリウッ드의黄金時代の最も有名な映画スターの一人になった。モンローが“シャネルのNo.5”と答えたのは、1952年の事である。

ハリウッドには、美女は掃いて捨てるほどいる。彼女は、自分に研ぎをかけた。細いアーチ型～への字型の眉、真っ赤な口唇と右頬の小さなほくろ。顔の表情にも細心の注意を払い、決めポーズは、目を細め、時には軽く眼を閉じ、あごを少し突き出し、軽く口をあける。真紅の口唇と真っ白な歯並びを、くっきりと対比させる。

そしてモンロー・ウォーク。

彼女の写真集などを眺めていると、彼女が

自分を他の美人女優と異なる、個性的、魅力的な銀幕のスターに研いでいく努力の跡を強く感じとる事ができる。

しかし、当時の映画界では、彼女はパワハラ、セクハラと常に戦わねばならず、更に嫉妬深い夫にも耐えなければならず、神経症、不眠症に悩まされた。

62年、モンローは36歳で死亡。バルビタール過剰摂取が原因と言われているが、諸説ある。

肝心の歌である。

彼女の歌というと、J・F・ケネディの誕生日のセクシーな「ハピバースデイ・ミスター・プレジデント」を思い浮かべる方が多いと想像されるだろうが、実際は「帰らざる河」などC&W調の軽快なものが多い(図18)。

彼女の遺言は、遺産は、母、親戚、秘書、友人、同僚などの他、ここが最も重要な所であるが、精神科の医療機関あるいは、研究機関に寄付するように、というものであった。

(つづく)



図18 マリリン・モンロー